

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04545

研究課題名（和文）ニヒリズムを基底とした教育観の変容の分析と再検討

研究課題名（英文）Analysis and examination of modification of the view of education based on nihilism

研究代表者

相澤 伸幸（Aizawa, Nobuyuki）

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20331259

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：（1）ニヒリズムを基底や前提とした教育概念を考察し、理論や原理的な再把握を試み、その構想を全国学会誌で発表することができた。  
（2）ドイツやタイの学校を訪問し、管理職へのインタビューを行ったり、教育に対する意識や意欲等の現状を調査したりすることができた。  
（3）理論と実践を融合した教育観を再構築して、シンポジウムや研究会や講演会などで広く社会に提案していった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はニヒリズムを基底とした教育観の変容について考察したものである。当初計画の4年と1年の延長のあわせて5年間の研究期間の中で、研究代表者が、編者として書籍を2冊出版し、単著論文を5編執筆し、学会やシンポジウムで2回の発表と、その他新聞などに3つの論考を執筆してきた。全国学会誌や書籍などを通して、本研究結果を広く社会に還元することで一定の学術的質を維持しながら社会的意義を果たすことができた。

研究成果の概要（英文）：1.This research was based on the results of considering the educational concept with nihilism. Through this research having tried to re-understand the theory and principle bring to publish the concept in the academic journal.  
2.The investigation through visiting schools in Germany and Thailand and interviewing managers made clear the current state of awareness and motivation for education.  
3.This reconstructed view of education that fused theory and practice was suggested widely to society through the symposiums, study groups, and lectures.

研究分野：教育哲学

キーワード：教育哲学 ニヒリズム 道徳教育思想

## 1．研究開始当初の背景

ニヒリズムそのものに関する研究は、日本では仏教思想をはじめ西田幾多郎、西谷啓治、上田閑照ら哲学や宗教学での議論が豊富にある。ヨーロッパでも実存思想やロシア文学、あるいはニーチェを始めとする多くの思索がある。教育哲学でも上田薫(1956)など戦後を中心に多く議論され、その傾向は最近でも続いており、汐見稔幸(1999)が堀尾教育学をニヒリズムからの脱却の試みとして総括したり、吉村文男(2006)が人間学的故郷喪失を学びのニヒリズムとして論じたり、岡本哲雄(2012)が教育研究の最前線としてニヒリズムをテーマに取り上げたりしている。つまり、ニヒリズムの教育学的考察は、古典的であると同時にきわめて今日的な課題であると言える。

こうした課題意識を、近年の教育観や発達観の変容と結びつけ、「教育」あるいは「発達」についての考え方の変容を、先の見えないニヒリズム時代の教育的変容と捉え、ニヒリズムを考慮した教育学的考察が要請されていると考えた。このニヒリズム時代の教育観の考察を試みようとしたのが研究開始当初の背景である。

## 2．研究の目的

本研究では、ニヒリズムを教育学の学的成立の根底に据えることで教育の新たな場や意味を再検討し、その結果を踏まえた学の出発点を提示することを目的とした。つまり、ニヒリズムの観点からの教育の考察には、教育や発達以前の非教育や未発達の事実を基礎とする新たな方策を導入する契機が含まれているという仮説の提示から開始し、それを歴史的に理論的に示すことをめざした。(課題1)

さらに現代日本の青年期の学びの意識に関する事前調査では、日本の中高生における自身の就職への見通しは相対的に低く、不安に満ちており、ドイツでの高い値と対照的であった。学びの適時期にありながら、将来への不安にさらされている中高生は、「学び」や「考えること」をどのように理解しているのか。この理解も目標にすることで、ドイツの学校での宗教教育の状況や意識変化を探り、分析を行うことをめざした。(課題2)

## 3．研究の方法

課題1については、文献調査とその精読を行った。教育概念はこれまで教育の独自性や固有性によって基礎づけられてきたが、現代の社会は飛躍的に多様性を獲得したことによって、教育概念が現状の変化に対応できなくなりつつある。そこでニヒリズムの観点を取り入れつつ、現代の宗教教育を参照するとともに、歴史的には明治期の倫理教育について考察することで、教育概念の再検討を行った。

また課題2については、海外の研究協力者とともに、ドイツの学校での宗教教育の現場やタイの現職教員の教育現場を訪問調査し、さまざまな対立がある中での学校における実践的な取組を調査し、その結果をシンポジウムで発表した。

#### 4. 研究成果

まず1年目には、日本ではニヒリズムと教育の関係をこれまで追究してきたのは主として宗教教育の分野を中心としてきたであろうと考え、宗教教育と教育の関係について研究をすすめた。その過程において、実践面である道徳教育についても考察を進めた。道徳教育に関する研究において宗教教育はどのように扱われてきたのか、これまでの先行研究を概観すると、3つの大きな傾向が見受けられた。そのうちの「宗教的情操」に着目して、特別の教科である道徳科における宗教的教育の可能性について考察した。

2年目では、計画段階で研究の協力を依頼していた宗教学や社会学を専門とするドイツの教育大学の教員と意見交換を行った。これまでは文献的に調査し、メール等で打合せをしてきたのだが、直接会ってこれまでの疑問点や微妙な考え方などを知ることができた。やはりヨーロッパの教育では、宗教教育が基盤としてあるために、教育におけるニヒリズムなどのようなことはあまり考察されていないのが実情であった。こうした点を検証するために、実際にドイツの学校や授業を数日かけてじっくりと見学し、管理職である校長にインタビューをするなど実地的な調査を行った。教育に対する明確なビジョンをもつ管理職の方も、宗教的基盤については特に課題があるとは思っていないのが印象的であった。ただしこれは、地域の事情や環境の影響が大きいのかもしれないということであった。この成果については論文にまとめ発表した。

3年目では、定説として語られることが多い、ルソーの『エミール』における発達観やそれを基調とした教育論について文献的に分析した。結論としては、ルソー自身、公的な制度などの公教育を主として語るのではなく、私的な教育と宗教を『エミール』で語りたかったのであると結論づけた。その上で、啓蒙思想を近代化の一つの源流と捉えた場合、啓蒙思想は現在のわれわれにM・ヴェーバー(1864-1920)が指摘したような脱宗教化、あるいは教会側の権力の排除などの宗教的中立性などをもたらしたとも考えられるが、今日『エミール』を再評価するならば、私的な宗教教育、すなわち宗教教育の世俗化および個人化が提案されたと考えられる点である。そうした結論を導く経緯において、個人や価値観の多様性、あるいは自由を求める時代的な精神構造が、その副反応としてのニヒリズムをも生み出したのであると考えた。

4年目では、本研究課題に対する考察をまとめ、その一端を「ニヒリズムと論理」と題して『教育哲学研究』にて紹介した。これは従来の教育学を否定するアンチ・ペダゴジーではなく、問い直しである。加えて、論文「明治期の師範学校における倫理と修身の再構築」も執筆し、近代の教育観の一つの源流を捉える歴史研究も実施した。

ただし残念ながら、新型コロナウイルスによる社会的影響の拡大の影響により、国内外での発表や調査がすべて中止になり、本研究の活動が著しく制限されてしまったので、研究期間を1年間延長することにした。

最終年度の5年目では、森有礼の思想へのスポンサーの影響を『倫理書』に即して考察し

た。この考察をとおして、西欧の道徳教育観と日本人の精神形成との関係性を検証する作業を行った。

以上の5年間の考察を通して、漸成であれ頓成であれ、従来の発達観に揺らぎが生じつつあることは確かであり、こうした意識の再認識こそが、ニヒリズムの重要性を示す先行的兆候として捉えられる。結論としては、こうした気づきを言語化していく作業が今後も必要であることを再確認した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 相澤 伸幸	4. 巻 21
2. 論文標題 「森有礼の思想にみるH・スペンサーの影響 - 『倫理書』を参考にして - 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『プロテウス - 自然と形成 - 』	6. 最初と最後の頁 119-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤 伸幸	4. 巻 20
2. 論文標題 「明治期の師範学校における倫理と修身の再構築 - 京都府（尋常）師範学校を参考にして - 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『プロテウス - 自然と形成 - 』	6. 最初と最後の頁 121-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤 伸幸	4. 巻 122
2. 論文標題 「ニヒリズムと論理」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『教育哲学研究』	6. 最初と最後の頁 51-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤伸幸	4. 巻 19
2. 論文標題 「『エミール』における宗教教育の教育史的意義 - 私教育に着目して - 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『プロテウス - 自然と形成 - 』	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤伸幸	4. 巻 18
2. 論文標題 「ドイツの宗教教育の現状と啓蒙的思考との関わり」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『プロテウス - 自然と形成 - 』	6. 最初と最後の頁 169-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤伸幸	4. 巻 27
2. 論文標題 「「特別の教科 道徳」をめぐって - 発表1」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本仏教教育学研究』	6. 最初と最後の頁 116-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤 伸幸	4. 巻 26
2. 論文標題 「道徳科における宗教的教育の可能性についての一考察」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本仏教教育学会 『日本仏教教育学研究』	6. 最初と最後の頁 163-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 相澤 伸幸	4. 巻 2701
2. 論文標題 「社会や地域創生と大学の使命」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育学术新聞	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 相澤伸幸
2. 発表標題 「近現代の公教育における宗教と道徳の位置づけ - 人権・宗教・道徳をめぐって - 」
3. 学会等名 日本ヘルダー学会秋季研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相澤伸幸
2. 発表標題 「道徳教育において宗教的教育はどこまで可能か」
3. 学会等名 第5回仏教教育学研究会シンポジウム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 笹田博通、山口匡、相澤伸幸編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 『考える道徳教育 - 「道徳科」の授業づくり』	

1. 著者名 相澤伸幸、神代健彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 128
3. 書名 『道徳教育のキソ・キホン』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------